慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E. A. Wallis Budge : The rise progress of assyriology., London, 1925.
Sub Title	
Author	恒松, 安夫(Tsunematsu Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.3 (1927. 9) ,p.154(466)- 155(467)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270900-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

配置に關する見解、及び佛國の Saussure の左傳、國語の歲星位置に關する論究等を擧げ、最後に著者、新城新藏、及び橋本增吉三氏の左傳考の要旨を紹介されてゐる。

「書經詩經の天文曆法」に於て、著者は先づ、古文尙書、今文尙書、僞古文尙書、眞古文尙書の關係に就て述べ、「眞古文尙書が周代及び其の以前の著作であつたか否かは充分な研究を要する。その爲には左傳國語の曆法を探つたと同樣の手段を用ひなければならぬ」と論じ、同樣の點檢を試み、僞古文尙書も、眞古文尙書も前漢末に出來たものとしてゐられる。尙著者は堯典の星座に關する古今東西の議論、及び著者の見解を述べてゐられる。

詩經については、著者はその天文曆法の記事を點檢し、「玆にまた詩經の編纂が書經と同時代があることを思はずには居られない。詩經の詩の中には、もとより民謠、朝廷の儀式に用ひる歌、又は祭祀に用ひる歌などの形で以前から傳來して居るものも數多く有ることであらう。しかし其の三百篇の編纂の完成したのは決して書經の完成以前に溯らせることは出來ないのである」と論ぜられてゐる。

尙本書は、多數の有益な圖版、挿圖、附表を收め、錦上更に花を添ふるの觀がある。

要するに本書は、著者其の人の豐富な學殖と、纖細な觀察とによつて成つた大作であつて、われらは此の至難な研鑽に多年從事された著者に痛く敬意を表せざるを得ない。これ敢て江湖に推薦する所以である。

紹介者の遺憾とするところは、紙數に限りあるため、充分紹介することが出來なかつたことである。また紹介した所でも、曲解さるるやうな所があるやも圖られない。これは淺學菲才の紹介者の責任であつて、此の點は、切に著者の御寬恕を希ふ次第である。（宮島貞亮）

E. A. Wallis Budge: The Rise & Progress of Assyriology. London, 1925.

アッシリア學が今日の進步を遂げるまでに、如何に多くの學者の心血が注がれたかを知ることは單にアッシリア學に興味を有する者許りでなく、進んでアッシリア學を研究せんとする者の是非とも知らなければならない事柄であると思ふ。

Rogers の History of Babylonia and Assyria や Jastrow の The Civilization of Babylonia and Assyria 等を始めとして、アッシリアに關する諸書にはアッシリア學の進步發達に關して詳細なる說明が行はれて居るが、本書の如く斯學の起原より現在に至るまでの發達の經過を細大漏さずまとめたものは他に類を見ない。而も著者バッジ博士は斯學の權威者として第一に推すべき人物である點に於てをやである。

著者は一八八三年大英博物館のアッシリア部の助手に任命される以前、既に十一年の間アッシリア學の研究に沒頭し、この間に楔型文字を解讀した英吉利の學者の殆ど悉くに知己を得た。加ふるに著者が四十一年の長い間大英博物館に職を奉ずる間、同博物館

を訪れた歐米の學徒と接觸するの機會を得、而して、著者自身も同博物館の命により親しくアッシリアの古蹟を踏査し、發掘して多數先輩の業蹟を見聞考究した。著者はその學識經驗共に現在イギリスが有するアッシリア學の泰斗として萬人の認むる所で、多數の奬めに從つて本書を著はしたことは、吾人の甚だ欣快とするところである。

著者はアッシリア學の創始者を以つて H. C. Lawlinson であるとし、彼に對して最大の敬意を抱いて居る。それ故著者は本書に於てロウリンソンの業蹟を最も詳細に述べようと企てゝ居るやうに見受けられる。これに次いで Trustees of British Museum がアッシリア學を樹立し、それより漸次斯學の研究が西歐諸國に傳播し、終にアメリカに渡つて今日の確乎たる根據を築くに至つたものである。アッシリア學がその淵源をイギリスに發することに著者は大いなる誇を抱いて居るのである。

第一章はペルシアの Takht-i-Jamshîd, Murghâb, Naksh-i-Rustum 竝に Bihistûn の四ヶ所に存する古代の碑面に刻まれた楔形文字に關する、第十五世紀の中頃から第十九世紀の中頃までの旅行者の見聞錄について述べ、それ等の見聞錄が如何にヨーロッパの學者の間に研究心を喚起するに至つたかについて語つてゐる。第二章は、特に Bihistûn の斷崖に起されて居る三樣の文字に關する旅行者の記錄に費されてゐる。楔型文字解讀の端緒が開かれたのは實にこの Bihistûn の碑文の研究からであつた。第三章はペルシアに遺つて居るこれ等の楔型文字の解讀の序幕について起されて居る。第四章以下第十章まではロウリンソンの研究史であつて、彼の超人的努力によつて遂に神祕の扉が開かれるに至るまでの記錄である。第十一章は大英博物館によつて行はれたる發掘につき第十二章は同博物館に於ける發掘品の保存に關し、第十三章は蒐集品の目錄作製について、第十四章は楔型文字のテキストの發刊について記され、第十五章はイギリスのアッシリア學者、第十六章は佛、西瑞、獨、伊、和蘭、北歐諸國、アメリカ等の諸國のアッシリア學者の業蹟が記述されて居る。

本著の讀者にして、諸學者の努力によつて無から有を生むが如き難事業が達成されたことに驚異を感じない者はないであらう。彼等の不屈不撓の精神と學者的良心とは吾人に偉大なる教訓を遺して居る。余は本書をアッシリア學研究の好指針として推奬する許りでなく、學徒の修養書としても亦價値あるものと思ふ。（恒松安夫）

大日本史料第五編之六（東京帝國大學史料編纂掛發行）

大日本史料の編纂が、史料編纂掛の一大事業であることは、茲に贅言するを要しない。

大日本史料第五編は、鎌倉時代、承久の戰役より北條氏の滅亡に至る百十二年間であつて、今回上梓された第六册は、寛喜二年の末より翌三年十月に亘つてゐる。此の中、前年より繼續されてゐる大饑饉の顚末は、最も注意すべき記事であつて、當時の經濟界に於ける動搖、世道人心に及ぼした影響、これに對する朝廷と幕府との措置、政策等が明にされてゐり、其の材料は、從來世に